日常生活史 ── F氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」(その六)

宝 福 則 子

はじめに

本稿は,『人文研究』第91・97・98・99・101輯に続く,「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については,第91輯を参照されたい。利用した当該資料は,1980年4月2日に,F氏のブラウンシュヴァイクの自宅での5時間半にわたるインタビューをA4タイプ用紙68ページに書き起こしたものである。ここで,参考のため,まず,F氏の略歴と両親について簡単に記しておく。

1909年7月14日	ブラウンシュヴァイクで誕生
1924年－1928年	アンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社の木工品試作工
1928年以降	グリンメ・ナターリス社の工具製作工
1916年－1933年	自由体操協会
1924年－1928年	木工労働者連盟
1926年以降	自然愛好旅行家協会
1926年－1928年	社会主義労働青年会
1928年以降	SPD党員
1928年－1933年	ドイツ金属労働者連盟
1928年まで	青年ライヒスバンナー
1928年－1933年	ライヒスバンナー
1930年以降	ドイツ・フリーメーソン協会

1928年－1929年　自由体操協会青少年部会長
1935年3月23日　女子工員と結婚

父：1879年にブラウンシュヴァイクで誕生し，1916年にロシアで戦死。職業は1893年から1915年まで板金会社ルンゲで板金裁断士として従事。ドイツ工場・農業・未熟練労働者連盟，SPD党員，1896年から1915年までフライエ・ビューネ演劇協会に所属。

母：1878年にブラウンシュヴァイクで誕生し，1962年にブラウンシュヴァイクで死亡。1892年から1901年および1927年から1922年まで女子工員として働く。1901年から1917年および1922以降は主婦。ドイツ工場・農業・未熟練労働者連盟に所属。出産3回。

1．両親と兄たちについて

父は，ローベルト・エーリッヒ・アルヴィン *Robert Erich Alwin* という名前で，普段はローベルトと呼ばれていました。母は，ベルタ *Bertha* という名前でした。両親は三人の男の子を生みました。長兄は，1901年8月15日に誕生しました。次兄は1903年10月27日に生まれ，昨年，亡くなりました。私は一番末の息子です。

2．下宿人ヨゼフについて

ヨゼフ・ツォルン *Jozef Zorn* は，父の戦友でした。彼は，父が戦死したら，私たち家族の面倒を見ると約束していたのです。父も，私たちにそう言っていましたし，「もし，私が亡くなったら，私の家族の面倒を見てくれ」と父も彼宛の手紙に書いたのです。

ヨゼフは独身で，トリアー *Trier* のフェルクリンゲン *Völklingen* の，敬虔なカトリック信者の家庭の出身でした。フリーメーソン協会員 *Freidenker-*

Verband でもありました。それで，両親に「あなたは *Sie*」という，距離をおいた敬語で話しかけなければならないほどに，仲違いしてしまったのです。教会から破門され，ここブラウンシュヴァイクの社会民主党 *Sozialdemokratische Partei* 支部の役員と，フリーメーソンの初代支部長をつとめたのです。彼は 1931 年に 51 才の若さで亡くなってしまい，可哀相でした。職業は工具製作職人 *Werkzeugmacher* でした。私は，彼には，考えられないほど多くのことを感謝しなければなりません。私の政治的な成長も彼のおかげでした。彼は 1927 年に，私たちの所に越してきて，1931 年に亡くなったのですが，ある程度，私たちの教育をしなければならないと感じていたのです。

私は，毎日，ヨゼフにずいぶんたくさんの注意も受けましたが，彼からとても多くのことを学んだと言わねばなりません。

彼は，とても几帳面な人間でした。だから，最初は，ただの工具製作職人でしたが，その後グリンメ＆ナタリス社 *Grimme & Natalis* で，マイスター，つまり工具製作のマイスターになったのです。彼は，最初は MIAG 社にもいました。そのおかげで，私はそこの見習い修業の口を得たのです。その後，私はオリンピア社 *Olympia*，つまりブルンスヴィガ *Brunsviga* のところで職を得たのです。つまり，私は，前にも言ったとおり，彼から刺激を受け，後にもう一度，学校へ行きました。その時は，もうかなり歳をとっていましたけれども，ともかく学校へ行けたのは，すべて彼のおかげです。彼が学校にかかる費用を払おうとした時に，「何もいらない」と私は言って，後から学校へ行ったのですが，そうしようとした元々の刺激は，彼から受けたのです。この男には，ある癖があって，例えば，工場の中をを見回って歩く時，たくさん置いてある工具の鑢は，きちっと大きい順に置かれていなければ我慢できないとか，つまり，とても几帳面な人間でした。その後，私もいくらかその癖を受け継ぎました。

私もマイスターになりましたが，その時，多くの人が「あれは，ヨゼフのコピーだ」と言ったものです。私が少年の頃，兄の長靴を見て，その底を平らに修理したとか，そういう類のこともありました。その様なことが，一番

上の兄には我慢できなかったのです。それで，彼は18才で，まあ，当時は，そういうことが普通だったのですが，戦争の後始末をするために，ロートリンゲン *Lothringen* に行きました。このブラウンシュヴァイクでは，若者たちは仕事がなかったのですが，そこへ行けば，たくさんの金を稼ぐことができましたから。この兄は，私より8才ほど年上なのですが，ヨゼフのことをそれほどには受け入れませんでしたから，二人はお互いにうまが合いませんでした。それで，長兄は，一部屋を借りて，結婚前に家を出たのです。

ヨゼフは，兵隊に行っていたのですから，戦争前に私たちの所に越してきたのではありません。彼が，私のMIAG社での工具製作工の見習い修業の口の面倒を見てくれたのだから，つまり，私の見習い修業時代前だから，多分，23年に私たちの家に越してきたのです。というのも，その時，彼はこの会社の工具製作職人だったのです。彼がトリアーからブラウンシュヴァイクに来た理由は，当時，多くの人びとがそうであったように，仕事を求めて来たのです。彼がブラウンシュヴァイクに来たこと自体は，偶然だったのです。最初はこのブラウンシュヴァイクで，それもロス通りですが，他の家庭に下宿していました。その家で，私たちのことを聞き，突然，父との約束を思い出したのです。それで，私たちの家を訪ねて来て，私たちの状態について尋ねました。母と話しているうちに，「あなたの所に一部屋空いていますか？　私は，部屋を探しているのです」ということになりました。彼は，下宿のおかみさんと仲違いしていたのです。母が，少し考えさせてほしいと言ったら，彼は，三日後にまた来ました。そこで，母が，「よろしいです」と言い，私たちは彼に一部屋を明け渡しました。3部屋しかありませんでしたから，私たち3人の男の子は，一部屋でみな一緒に寝なければなりませんでした。その後の住居でも，長兄が家を出るまで，ずっとそうでした。

3．妻の家族について

姑は，生粋の農婦でした。農村の出身で，もちろん舅同様に，きつい畑仕事をしなければならなかったのです。彼は，小さな時分から働かなければならないほど，家が貧しかったそうです。彼らは，シュティッディエン *Stiddien* で知り合いました。彼女は，レップナー *Reppner* の出身でした。そして，彼らは結婚し，つぎつぎに子供が生まれました。生まれた子供は，全部で11人でしたが，その内の多くが，5才になる前に死んでしまいました。最終的に育ったのは，5人でした。だから，1928年に，妻の家族と知り合いになった時，子供は5人だけでした。その内，長男ですが，一人，第二次世界大戦の時，ロシアで戦死しています。まだ2人の娘と息子が1人，生きています。

彼らは，1911年に，シュティッディエンでの日雇いの農業賃労働者の生活から抜けだして，ここの町ブラウンシュヴァイクにに出てきたのです。日雇い賃労働者の生活は，もちろん，本当に良くなかったのです。

父親は，組立工として仕事を始めました。ここの地下工事局，つまり，ブラウンシュヴァイク市の工事局の配管工としてで働いていたのですが，彼らは，組立工と言っていました。そうする内に，彼は，同僚と何かの原因で仲違いもしました。ストライキもその原因のひとつだったようです。それで解雇もされ，もちろん家族は困窮したのです。長男は，板金工として職業教育を受けたのですが，その当時は，まだ石炭販売店の石炭運搬人でした。妻は，シュマルバッハ社 *Schmalbach* の女子労働者として働いていました。長男は，もう結婚していたのですが，その二人が，いまや一家の稼ぎ手となってしまったのです。だから，実際的には，私の妻が家族を養わなくてはならなかったのです。そんな状況の時に，私が彼女と知り合い，私は娘が家から出ることを父親に了承させようとしました。というのも，彼女の稼ぎは，失業手当の算出の際に，計算に入れられていたのですから，彼女が家を出れば，もっと高額の失業手当を貰えたからです。しかし，父親は，私に腹を立てました。彼は，その背後に何かたくらみがあると思ったのです。彼女は，ただ，部屋

を借りるつもりだったのにです。それで，私もそうしました。

当時，私たちは，まだ付き合っていただけでした。彼女が家を出た後，彼は，一挙に失業手当が増額したことに気が付きました。つまり，彼は，ずっと多くの失業手当を貰い，その上，私の妻は，その後も家に援助を続けました。つまり，そのように，実際に経済生活は改善されたのです。それでも妻の家族の状態は，本当に何と言ったらよいのか，ひどかったのです。正直言って，私が妻と知り合って，10カ月もたっていなかったのなら，あるいは，知り合って8日後に彼女の家の中の様子を見たのであったなら，すぐにきびすを返していたことでしょう。私が思うに，私は妻を……しなかったでしょう。

その状態たるや，つまり，なげやりなのです。失業とか困窮といったものが，とんでもない抑鬱状態を作り出していました。誰もが何かをしようという意欲を失っていました。

彼女の父親の失業は，大恐慌中に始まったのです。私は，29年に彼女と知り合って，29年に初めて家を訪れました。姑の誕生日でした。彼女は50才になったのです。まだ今日のことのように，よく覚えています。私は，当時，もうエギディエンマルクト *Aegidienmarkt* に住居を構えていました。今は，すばらしい歴史的建造物に組み込まれている住居です。ただ，当時は，誰もそこに住みたがらなかったのです。つまり，きれいにペンキを塗られていたら，外側からはとても素晴らしく見えるのですが，ここも，当時はそんな風でした。つまり，暗くて，中側の部屋には窓が無かったのです。

ロス通りで　―　今は，エルンスト・アンメ通り *Ersnt-Amme Straße* ですが　―　とっても素晴らしい住居に住んでいたというわけではありませんが，でもやはり，妻の家族の住居とは違いがありました。本当に，私が，きびすを返して外に出て行ってしまったかもしれないような住居だったのです。でも，私は，妻と知り合って，すでにもう10カ月もたっていました。彼女は，清らかで行儀の良い女の子でしたし，まさにそのようなことが，私を彼女のもとに引き留めたのです。本当に，彼女の両親は，ある種の困窮状態にありました。しかし，それは，自業自得だったわけではありません。そう

ではなくて，つまり，それは，農業労働者が慣れない町へ出てきて，働いて家族を養うのが困難であったという風に見るべきでしょう。

母親は籠を背負い……父親は失業中，家でスリッパを作っていました。古い布地と自転車のタイヤのゴムで，スリッパを作っていました。彼女は，籠を背負って，農村部へ行って，このスリッパを売って歩いたのです。そのようにして，彼らはどうにかこうにか生活していました。売って，お金を貰うだけでなく，ソーセージやハムや卵のような，その時々に，ちょうどそこにある食糧と交換もしました。母親が生まれた時からの知り合いが，たくさん村にいたのです。だから，もちろん，彼女はそういう縁を頼りにスリッパを売って歩いたのです。彼女は，とても小さな体の弱い女の人で，だから，この仕事は2～3年続けて，やめました。彼女は静養しなければならなかったし，彼女自身も，静養したかったのですが，これがまたできませんでした。

4．両親の家の住居

〈ハンブルガー通りの家〉

私は，ハンブルガー通り *Hamburgerstraße* で生まれましたが，記憶はありません。しかし，ここの住居の持ち主は知っています。ディートリックス *Dietrichs* だかフリートリックス *Friedrichs* という名前で，1階に店を持っている商人でした。

〈アイヒタル通りの家〉

アイヒタル通り *Eichtalstraße* 1番の住居が，私の記憶にある最初の家です。小さな家で，平屋でした。上に増築された居間も含めても，本来，一家族用の家でしたが，二家族，というか，持ち主と私の家族が住んでいました。

私たちの住居は，上の階にある，天井が斜めの形の住居 *Wohnung* でした。木の階段を上がっていくと，ホールがあって，そこから各部屋に行く造りになっていました。3部屋ありましたが，その内のひとつが台所だったのかど

うかは，はっきりしませんが，当時の基準から見ても，もっとも質素な部類に入る住まいでした。

暖房器具は，もちろん，当時，一般的だった，小型の円筒形ストーブでした。各部屋にはなかったけれど，居間にストーブがあったのです。台所には竈，つまり開口式の竈がありました。当時はまだ，どこの家でも褐炭コークスを使っていました。この褐炭コークスというのは，ブリケットを粉々にしたような，コークスの一種なのですが，これが，とてもよく燃えるのです。この竈は，下に脚のついた戸棚のような形をしていましたが，開口部があり，ロストルと前側に扉，上に大きなブリキの箱がついているものでした。その形が，最初の頃の竈で，その後，30年頃には，白いエナメル塗りの湯沸かし器と，埃がたたないように，外に引き出せる灰受け皿がついた，まさに戸棚の形をした竈のモデルが完成したのです。この竈は，もう開口式ではなく，もちろん閉鎖式でした。この竈が，私たちの住む地域で典型的に使われていたものです。ブラウンシュヴァイクの奥さん達は，必要な時にはいつでも暖かいお湯があるので，その竈を好みました。奥さんたちが，この竈にスープの鍋をかけたまま散歩に出たり，遠くに出かけたりしても，晩にはスープが出来あがっているというわけです。この竈は昼夜を通して，ずーっと燃えていました。ただ，最初の型の竈では，水をこぼすと，ものすごい臭いがしました。完全な閉鎖式のストーブではなかったからです。つまり，赤い熾きから水蒸気がたちのぼったのです。後に改良された新型では，そんなことはありませんでした。台所には，ストーブもありましたが，あまり寒くない時には，この竈が台所の暖房も兼ねていました。何処の家も大体そんなものでした。アイヒタル通りの記憶は，これくらいのもので，かなりぼんやりとした記憶しかありません。

この住居では，両親と3人の子供の計5人で暮らしていました。他の親戚等は一緒に暮らしてはいませんでした。他人と一緒に暮らしたこともありません。三人の男の子供たちと母と父だけで暮らしていたのです。

アイヒタル通りの家主は，アイゼンプレッター*Eisenplätter*という中年の

男でした。中年の夫婦でしたよ。

〈ロス通り 14 番の住居〉

次がロス通り *Roßstraße* 14 番の住居です。4 階建ての家でしたが，8 家族が住んでいました。この住居も屋根裏部屋でした。部屋代は 13 マルク払っていました。トイレは，もちろん，まだ地下にありました。洗濯部屋が，中庭の別棟にありました。だから，やはり当時のこの地域でも，もっとも簡素な住居でした。私たち家族専用の台所は，廊下にありました。建物の左側半分に，もう一家族が入居していて，私たちは右側半分の住居に入っていました。どちらの住居も完全に独立していて，それぞれに台所もありました。廊下は他にはなくて，これだけでした。階段を上がってくると，廊下があって，ここから最初の部屋に直接，入ってくるようになっていましたが，昔の古い家はそういう造りだったのです。この住居には，3 部屋ありました。天井が斜めの部屋でした。1 部屋だけが中庭に向いていて，台所の天井はまっすぐで，大きな窓がありました。他の部屋には斜めの屋根裏部屋用の窓がついていました。もちろん，地下室の物置もありました。屋根裏の物干し場もありました。ただし，私の家族専用の物干し部屋はありませんでした。私たち子供は，屋根裏の物干し部屋で遊ぶのが大好きでした。お風呂はありませんでした。

ここでも家族全員で住んだのです。まだ，誰も家から出て行ってはいませんでした。ここでも，他には家族以外の誰も一緒には住みませんでした。

このロス通り 14 番の住居は，アスファルト・フェルトを作る会社のシャハト社 *Schacht* のものでした。でも，家賃は，副社長で，同じ家に住んでいたシーアリンク *Schierling* に払っていました。シャハト社と私の家族とは何の関係もありませんでした。シャハトの息子は，一度，見かけたことはありましたが，彼自身は，見たこもありません。兄たちも，そこで働いていたこともないし，依存関係はまったくありませんでした。

〈ロス通り12番の住居〉

その次が，ロス通り12番でした。この家も4階建てで，同じ造りでした。ここに越した時には，もう父は戦死していましたから，4人家族で住みました。最初は，他には親戚も他人も一緒に住んでいなかったのですが，戦後になって，又貸しをしました。というか，ヨゼフが下宿人になりました。長兄は家を出ましたから，家族3人と彼の計4人でここに住みました。

それまでの住居と比らべると，住環境にある程度の改善があったのだと言えます。この住居は，初めての2階にある住居で，きちんとした部屋が3室と台所があって，トイレはもう地下ではなく，下の階にありました。大きな窓があって，外の通りを見ることもできたのです。

そして間もなく，通り全体に電灯がつき，私たちにとっては便利になりました。以前の住居では，石油か獣脂の灯りでした。地下のトイレに降りて行くときには，獣脂の灯りを持っていったものです。当時は，石油か獣脂の灯りが，一般的に普及していました。電灯がついた時には，もうガス灯もありました。住居にガス灯用の白熱マントルを備えている人もいました。その人の住居がいつ建てられたのかにもよりますが，私たちの家から5軒か6軒先の，世紀初頭に建てられた家には，ガス灯がありました。私が知っているかぎり，ロス通り12番の私たちの家にもガスは引かれていたのですが，電灯が引かれるまで，上の階にまではガス管が引かれていなかったので，私たちはガスを使用することはできませんでした。今もまだ，私は，ガス管を施設した男の名前を覚えています。フィルビガー*Filbiger*という名前の配管工でした。おそろしいほど，おしゃべりだったので，彼の名前は忘れもしません。彼はおしゃべりにエネルギーをフル回転させていました。私たちは，「まったく，彼が働いていてくれたらなー！」と，いつも言っていたものです。ロス通り12番の住居については，他には，特別なことは覚えていません。納戸はなかったけれど，小さな廊下がついていました。

この住居は，私たちにとっては，初めて周囲からきちっと独立した住居だったのです。つまり，同じ家の中にある，他の住居から完全に分離された住居

でした。両隣には，まだ住居があって，そちらには住居の中にも，廊下があって，その廊下にそって各部屋が並んでいました。屋根裏の物干し場もありました。

ロス通り12番の持ち主は，ヨハンナ・グルーネヴァルト *Johanna Grunewald* という老婦人でした。彼女の持ち家だったのですが，彼女の子供たちが結婚して，ここに住んでいました。しかし，私の家族と彼らとの個人的な付き合いはありませんでした。私たちは，下の彼女の店で飴を買いはしたけれど，他には何も付き合いらしいことはなかったのです。

〈アルトシュタットリンクの住居〉

アルトシュタットリンク *Altstadtring* の住居は，もうセントラル・ヒーティングもあり，とても近代的な建築でした。やはり3部屋の住居でした。浴室もあり，すべてが揃っていて，浴室にバスタブと便器がありました。廊下，地下室，屋根裏の物干し場，台所と，すべてが揃っていました。それは，1927年に新築され，当時，もっとも近代的な3階建ての建物で，6家族が住んでいました。きちんとした3部屋の住居で，私たちは，ここに1928年に引っ越しました。しかし，この住居の家賃は，当時としては，とても高くて，家賃が120マルクもしたのに，さらに家賃の値上げを要求されたのです。

それで，1929年にヴィッテキント通り *Wittekindstraße* へ引っ越したのです。

このアルトシュタットリンク36番の住居には，母と次兄，それに下宿人のヨゼフの4人で住んでいました。この住居は，ブラウンシュヴァイク住宅協同組合 *Braunschweiger Hausgenossenschaft* の持ち物でした。建設協同組合 *Baugenossenschaft* のではなくて，住宅協同組合のです。ちなみに，家の向かいには建設協同組合がありました。住宅協同組合の住宅には，組合員でなくても，入居できましたが，いくらかの出資金が必要だったので，母の年金の一部を換金して，それで出資金を工面したのです。通常，協同組合では，出資金を出さなければならないのです。家賃がそれに相応して高かったので，

組合員でなくても入居できたのです。出資金を払ったから，組合としては，喜んでいたことでしょう。出資金の額は，わかりません。私が知っているのは，母が年金の一部を換金したということだけです。

〈ヴィッテキント通りの住居〉

ヴィッテキント通り1番の家は，4階建てで，8家族が住んでいました。この前と同じ種類の住居でした。ここにも，物干し場のついた屋根裏部屋，地下室，トイレと風呂にいたるまで，必要な設備はすべて揃っていました。ただ，セントラル・ヒーティングの暖房設備は，ありませんでした。ここでは，まだ各部屋ごとにストーブを置いていました。

私は，ヴィッテキント通りには，38年まで住んでいましたが，1929年から1930年にかけては，母と次兄とヨゼフに私の4人で住んでいました。ヨゼフもまた一緒に越してきたのです。35年までは母と2番目の兄もここに住んでいて，私が36年に結婚した時には，妻がこの住居に越してきました。妻が越してきた時には，兄は結婚していましたし，その後，38年に，私は持ち家の住居を持つことができたのです。

5．労働者居住地域の様相

私達が住んでいた通りには，工場が二つありました。缶詰工場のウンガー&ゾーン社 *Unger & Sohn* とアンメ・ギーゼッケ&コーネゲン *Amme, Giesecke & Konegen* の MIAG 社です。この通りの大部分の住人は，この二つの工場で働いていました。缶詰工場では女性労働者が多く，MIAG 社は，3600人の従業員を抱えていましたが，ここでは，もちろん男性労働者が多かったのです。朝の7時に仕事が始まりましたが，辺りではいっせいに家々の扉が開き，私もそうでしたが，家から作業着のまま仕事に出かけたので，青い作業着が流れているような光景でした。この事実からも，生粋の労働者居住地域といえます。社民主義者が集まる「シュルツェ」*Schulze* という居酒屋もありまし

た。ここは，地域のペトリトア協会 *Ortsverein Petritor* の集会所でもありました。タバコ屋のゲルラント *Görland* もありました。その隣には，今，板金・配管業をしているハルトマン *Hartmann* の父親の小さな作業場がありました。彼自身は，MIAG 社の配管マイスターでした。彼は，片手間に，ここで，ウンガー＆ゾーン社の配管の仕事を請け負っていたので，そのために向かい側に小さな作業場を作ったのです。MIAG 社の背後には何もなく，原っぱでした。ここから農地がはじまります。苗畑がありました。

ずっと後に，MIAG 社は，ここに事務職員用の社宅を建てましたが，私たちは，これを公務員の家と呼んだものです。これは，今でいう連続住宅ですが，たくさんの 1 家族用住居が横に連続して並んでいるものでした。ここは，どの種類に属するのか分からない場所でした。住民は，事務職員だったので，小中産階級になったばかりの人びとでした。事務職の社員でしたが，「お前，今日，何処へ行くんだい？」「公務員住宅へ」というように，私たちは「公務員」と呼んだのです。とはいえ，大部分の住人の仕事からいえば，生粋の労働者居住地域でした。ツェラー通り *Celler Straße* は，当時の州鉄道の境界線からエルパー *Ölper* まで続きますが，この通りも住民構成に関しては，同じでした。MIAG 社に近道できる坂道がありましたが，この坂道を作るのに，MIAG 社もお金を出したということです。私たちは，この坂道とロス通りのぶつかる角に住んでいました。

ロス通りで一番背の高い家は，9 番の家で，12 家族用でした。生粋のプロレタリアーの家で，普通なら 8 家族しか住めないような，切妻屋根のある 4 階建ての家でした。煉瓦造りで，簡単な外装でした。17 番から 18 番の白い外装の家を，私たちは「白い家」と呼んでいました。当時，他の家は，むき出しの煉瓦造りだったのです。ロス通りには，バルコニーのある家はありませんでした。バルコニーも浴室もなかったのです。トイレは，部分的には階段室にありましたが，他の家は地下室に，または中庭に洗濯小屋を区切って作ったものもありました。16 番の後ろ側の家のトイレは，馬小屋にありました。

ヴェスト通り *Weststraße* も労働者の住む通りでした。今のフーゴ・ルター

通り *Hugo-Luther-Straße* です。この通りは，ロス通りの事情と同じで，住人の大部分はルター工場の労働者でした。家の造りもほぼ同じでした。

フリートリッヒ通り *Friedrichstraße* も同様で，住人は，ビュッシング工場 *Büssing-Werk* とつながっていました。ビュッシング工場といえば，隣接する，リーデ通り *Riedestraße* にもビュッシング工場の事務職社員がたくさん住んでいました。

ニッケルンクルク *Nickelnkulk* には，私の両親が住んだことがあります。母は，近所の人たちとの関係が良かったと言って，よく懐かしんでいました。私の次兄もニッケルンクルクで生まれたのです。両親が，そこから引っ越したのは，次兄が1903年に生まれた後ですが，私は1909年にハンブルガー通り *Hamburger Straße* で生まれていますから，この間の1906年頃でしょう。母がアーレンス家 *Ahrens* の話をしていたのを，まだよく覚えています。その家族は，とても親切に面倒を見てくれて，気持ちのやさしい人たちだったそうです。心の通った住人共同体だったにちがいありません。「アーレンス」という名前は，私の頭から離れず，いつもこの名前を思い出すのです。新聞で「アーレンス」という文字を読むと，かならずニッケルンクルクのことを考えます。

私は，ニッケルンクルクの外れの，リッター通り *Ritterstraße* にあった，国民浴場 *Volksbad* に，しばしば通っていました。「ニッケルンクルクを通るやつは勇気がある。ニッケルンクルクでは殴られるというのに」と言われていましたが，殴られたことはありません。ニッケルンクルクの外れのカイザー通り *Kaiser straße* では，少年や若者たちが，いつも夕方，本当にセンチメンタルな唄をとても上手に歌っていました。ハーモニカや他の何かで伴奏して，夕暮れの中で，まったくすばらしかったものです。

私は，ニッケルンクルクのチームとサッカーの試合をしました。彼らは，ほとんどが，大工と左官工で，「ウニオン」スポーツ協会 *Sportverein 'Union'* というクラブの会員でした。彼らは，とても強かったのです。おもしろいことに，私は，本当の名前はラオテンベルク *Raotenberg* という，サーカー場で

一番鼻っ柱の強い選手ということになっていた，ラオテと大変親しい友人になりました。彼は，私が困るようなことは，一度としてしたことはありません。だから，チーム・メイトが，「さあ，今日はお前が出て，ラオテに向かって行くんだ。そうしたら，彼は，軽い」と私に言っていたくらいです。以前，私が「ロイ」*'Leu'* でサッカーをしていた時の，アイントラッハト・チーム *Eintracht* のズルコップ *Surkopp* のように，一番てごわい選手でした。おもしろいことに，私たちは，今も，とても良い友人同士です。それに彼は，ニッケルンクルクのあの仲間たちの首領でした。ニッケルンクルクを通るときにラオテに出会うと，とても誇らしかったものです。だから，しばしばニッケルンクルクを通ったのです。

それから，*Wendenstraße* ヴェンデン通りにも行きました。ほとんどは，個人的な関係によりますが，これは大きいものです。ランゲ通り *Lange Straße* にそって歩いていくと，クリント *Klint* でもそうでしたが，家の玄関前に，16 才か 20 才くらいまでの，大人になりかけの若者たちが坐っていました。そして，歩道を歩いていると，脚をのばし，立ち上がって，「お前，何で，俺の足を踏むんだい？」と始まって，ボン，ボン殴りつけられて，すぐにカブのような顔になってしまうなどということが起こるのです。だから，安全のために，車道を歩かなくてはならないのです。そうすれば，誰もぶつかってはこられません。

「クリント，ニッケルンクルク，ヴェルダー *Werder* の住人は，ドイツを堕落させる一番の困り者だ」と言われていましたが，ヴェルダーは，それだけでまとまった地域でしたが，どちらかというと，ニッケルンクルクに近いでしょう。

これらの地域は，十分な社会的・経済的な権利を与えられていませんでした。学校教育は欠陥だらけだ，といつも言われていました。当時，特殊学校はなかったのですが，あったとしたら，子供たちの多くが，特殊学校へ行っていたことでしょう。ブライテン通り *Breiten Straße* にとても小さなキールホルン学校 *Kielhornschule* という養護学校がありました。ここには，父親の

顔も母親の顔も区別できないような知能遅れの子供が行きましたが，私の8年間の学校生活の間，たった一人の子供がここに入った程度です。そして，その子は，そこに2年間だけ通った後，また戻されてきました。今では，こんな事はありえません。特殊学校へ行ったら，適当な行き先がなければ，戻ってはきませんよ。

マウアーン通り *Mauernstraße* は，ランゲ通りのように，労働者の住居の多い通りです。ほとんどは，臨時雇いの未熟練労働者でした。当然，未開発であると特徴づけられるような水準の通りでした。100パーセントとは言いませんが，大部分がそうでした。

クロイツ通り *Kreuzstraße* には，まだ農家が多く，だから，牛小屋と豚小屋がたくさんありました。つまり，農家と労働者の家の混在居住地域でした。この評価は，実用的建築物ではあるけれど，未開発な住文化であったという意味です。家賃が安かったから，それ相応の人びとの集団が集まったということです。しかし，だからといって，私は，彼らを見下げているわけではありません。

私の父は，週に7タール，つまり21マルク稼ぎました。それで，7人家族を養ったのですから，簡単ではありませんでした。私たちは，1グロッシェンで肉屋で切れっ端を買い，それで1週間をしのいだのです。だから，何かの祝い事をするようなお金はなかったのです。そんなことはできませんでした。ここの住人の生活は，そういう水準だったのです。

これらの居住地域での生活は，そんなものでした。フリートリッヒ通りだろうが，マウアーン通りだろうが，クロイツ通りだろうが，ヴェスト通りでもロス通りでも，そこに住んでいたのは，みんな本当に大きな飛躍はできなかった人たちでした。もし，酒を飲み始めて自分の役からはみ出したりしたら，家族は底なしに全滅にされたのです。家に酒飲みがいる家庭は，もっとも低い水準になったのです。今は，たとえ家族の一人が大酒を飲んでも，他に稼ぎ手がいますが，当時，女性の仕事は少なかったし，奥さんたちは，今のように働きに出ませんでした。2人以上の子供がいると，奥さんは働きに

出ませんでした。幼稚園はなかったので，仕事を始めると子供のためにもっと出費がかさなったのです。たとえ，幼稚園の空きがあって，それほど高くなくても，出費があっては，働きに出る意味はなかったのでしょう。子供が一人だったとしても，また労働者の家であっても，奥さんたちは家庭にいました。女性の仕事口は，少なかったのです。

当時，精密工業はまだ発展していませんでした。ユーデル社 *Jüdel* は，女性は，掃除婦しか雇っていませんでした。当時のシグナル部門，つまり精密機械部門には，女性はいませんでした。ブルンスヴィガ社を例にとると，女性労働者は15%から20%でした。私がいた頃，ブラシを作る作業場には数人の女性がいましたが，その後，女性労働者はいなくなりました。コーヒーを淹れたりする，手伝い仕事をする女性は大きな部門にいました。事務仕事の教育を受けていない女性が事務室でできる主な仕事は，これくらいのものでした。

それにしても，私の子供時代，どの位の女性が，ここのMIAG社のあの事務職員用出入り口から出入りしていたかというと，今と比べて，とてもとても少なかったです。女性たちは，ほとんどが缶詰やブリキ製品工場で働いていました。もっと多いのは掃除婦として，働いていました。女性は，家庭の小間使いとして，また病院では手伝いの仕事をしていました。他には知りません。私の近所では，夫がMIAG社の，つまり，アンメ・ギーゼッケ＆コーネゲンの機械工で，奥さんが午後，家にいるようなら，彼女は働いていませんでした。内職をしていたのは，隣のエーリッヒ夫人 *Ehrich* くらいしか知りません。彼女には5人の子供がいました。夫は，MIAG社の未熟練労働者でした。彼女は，古い人形用の乳母車で，バケツに一杯分の袋貼り用の材料を持ってきました。それで，私も袋貼りの仕事をしました。最初は，手伝っただけですが，その後，数ペニヒ稼ぎました。でも，それはほんの小遣い稼ぎで，彼女の場合は，少しばかり余分にお金を稼ぐために，昼も夜も袋貼りをして，稼いでいたのです。

6．学校生活

私は国民学校では，成績は悪くなかったのです。比較的，良く勉強しました。私は，1年生から最後の学年までクラスで一番だった，ヨアヒム・ケルバー*Joachim Körber*をお手本にしました。彼は，いつも一番でした。当時は，まだクラスの成績の順番が発表されていました。彼と同じにように一番になろうと刺激されたものですが，私は，いつも53人の生徒の内の3番から10番目の間の成績でした。彼は，孤児で，祖父母の家で暮らしていました。父親は公務員だったと思います。祖父も公務員でした。ゲルゲス通り*Görgesstraße*に住んでいて，上品な中年の紳士でした。つまり，公務員の家系だったのです。ヨアヒムは，後に商業教育を受けたのですが，後年，まったく進路を誤って，横領でつかまり，刑務所に入りました。だから，彼はもう私の手本ではなくなりました。彼がそんな道に走ってしまった時，私たちはまったく愕然としたものです。

私が通った国民学校は，ディースターヴェーク学校*Diesterwegschule*だけです。学校で罰を受けたのは，一度だけですが，行動評価簿に付けられたことがあります。それは，こんなことでした。つまり，私の2年下の女子クラスに好きな女の子がいたのですが，学校の中庭は，敷石の左側は女子用，右側は男子用に分離されていました。監視の先生がこの敷石を行進してきます。この敷石が，つまり男女を分けていたのです。ある冬の日のこと，先生はアーチ形の校門の下にいました。このエリー・クルーヴェ*Elli Kluwe*という女の子は，一番かわいい子でしたが，12才か13才の子供にありがちなように，私はこの娘が少し好きでした。彼女が私に雪だまを投げたのですが，これは彼女の返答だったと思うのです。それで私も，雪の中に石が入っているのを知らずに，雪だまをぶつけて，彼女に擦り傷を作ってしまったのです。私自身，大変悪いことをしたと思ったのですが，これを先生が見ていて，私を女子の教室の前に連れていき，そこでさんざん殴られました。私は泣きませんでし

た。そういう時には泣かないものです。泣いたとしても，歯をくいしばるものです。その後，休み時間が終わってすぐに，3階の窓際で逆立ちをしたのです。下の中庭では，女子クラスが体操をしていました。「見せてやるぞ！」と言って，それをやったのですが，下では先生が体操の授業をしていました。彼はきちがいのようになってどなりました。そして「お前は体操の1をほしいか，それとも行動評価の1か？」と聞くので，私は体操の方がよいです」と答えたのです。そこで，私は行動評価簿に「3」を付けられました。1毎に3点の計算なので，9点のマイナスでしたから，クラスの成績評価の際には，大きかったのでしょう。成績が4番目から7番目に落ちてしまいました。学校で受けた処罰としては，それだけです。他には何もありません。

私自身は，その他には，学校でそんなに殴られたことはありません。先生は，すぐに殴る習慣があって，生徒たちは，しばしば，殴られました。カール・シュタンシュ*Karl Stansch*という教師がいましたが，彼はとても厳しかったのです。彼は，後にアフリカに行き，亡くなったということです。殴られる理由は，誰かをつついたとか，机の上のインク瓶を倒したといったことでした。あるいは，授業中にテストが良くできなかったといったようなことでした。

学校では，労働者の子供と中産階級の子供の差は，歴然とありました。父親が通りの掃除人だとすると，市の職員です。そうすると，その子供は，MIAG社やビュッシンク社*Büssing*の労働者の子供よりも，格がひとつ上でした。

先生は，一般的に，子供たちを良く指導してくれました。私たちの学校では，誰かがたとえば作文や書き取りでついてこられないと，先生は，その子供のベンチの隣に坐って，繰り返し，「もう30分ここにいなさい。お前がついてこられるように，もう一度，復習しよう」と言ったものです。今は，こういったことがないのを，とても懐かしく思い出しています。生徒が1クラスに53人もいたことを考えると，先生は生徒のために本当に良く時間をかけてくれました。しかし，それでも，どこかのサラリーマンや市の職員の子供

とは扱いが違いました。地下工事の労働者の子供が弱い場合，ずっと多く，その子の所に留まりました。あるいは，父親の職業が教師でも，当時はみんなが上の学校へ進んだわけではないので，私たちの学校に留まった子供もいました。そういう子供には2倍も多く質問したり，その子供たちは，前にかかっている黒板や地図の前に立って行き，答えければなりませんでした。

それに，ここの近郊のエルパーかどこかの村から来ている，ある子供の扱いが違うことにも気が付きました。その農家の子供は，自分の家で豚をと殺すると，当時は食糧難の時代でしたから，先生にソーセージを持ってきたのです。

中産階級の子供と労働者の子供の違いは大きかったものです。まだ覚えていますが，ここのMIAG社の所長だったドクター・シュタインメッツ *Dr. Steinmetz* の娘とドクター・ヴィスヴェーデル *Dr. Wiswedel* の娘が，ハリエット *Harriet* と一緒のクラスでした。ドクターたちは，父兄会の役員で，影響力が大きかったのです。彼らの娘たちは，日の当たる学校生活をしていて，もちろん，ギムナジウムにも行きました。その親たちは，子供の成績について，いつでもどうしたらよいのか，相談にのってもらえました。しかも，担任の教師が家庭教師までしたのです。それにくらべて，労働者の子供たちは，私の場合がそうですが，ただの国民学校でしか，しかもギムナジウムで教えられるある一定の次元までしか勉強はできませんでした。一緒に進学したかったけれど，それは本当に無理でした。私は，ギムナジウムへ行くための9学年目の勉強に付いていけず，実科学校に行き，そこで1年間，勉強しました。ただ，それはそれで，後に，それ相当に評価はされました。

7．子供時代の遊びと遊び仲間

同じ年頃の子供たちにくらべると，いくらか遊びの時間は少なかったけれど，私は，たくさん遊びました。彼らが，通りで遊んでいる間に，私は6足の靴を磨いていたものです。だから，遊び仲間たちは，外から，「早く降りて

こいよ！」とよく私を呼んで，遊びに誘ったものです。余暇が足りなかったということは，全然ありません。ロス通り時代は，当時，私の家は通りの外れで，そこからすぐに農地に続いていて，他には何もありませんでした。だから，この農地で遊んだり，まだ車の往来は無かったので，通りでもよく遊びました。通りでラウンダーズ（：野球に似たゲーム）かサッカーをしました。1時間に1台の荷馬車がMIAG社の屑鉄などを運んで通りかかると，道をあけました。あとは，通りを占領できました。夏には，ザールブリュックナー通り *Saarbrückner Straße* のシャーレ *Schaare* がある場所，昔は火葬場だった，鉄道の横断歩道のところに，マウスハーケ池 *Maushaketeich* がありました。この池で水浴びをしました。エルパー *Ölper* の堰まで水浴びにも行きました。そうでなければ，パーヴェルシェ・ホルツ *Pawel'sche Holz* へ行きました。パーヴェルシェ・ホルツの森には，橇か，古い樽を壊して下で結わえた手製の雪靴で行きました。80パーセントの余暇をパーベルの森で過ごしたとも言えます。

家の中で遊ぶことは，ほとんどありませんでした。仲間の家でも遊びませんでした。ただ，一人の友だちの家で，クリスマスの少し前に，当時はもう13才か14才になっていましたが，4～5人の男の子たちが集まったことはあります。その家で小さな子供たちの玩具を修理しました。その後の数年間，私たちはこれを続けて，数ペニヒで小さい子の玩具を修理しました。たとえば，両親が子供に古い玩具の馬小屋をまた造ってやろうとした時に，玩具の馬を修理してやったのです。パウル・クニッヒ *Paul Knich* の家の台所で集まったのです。他にはまったく，家の中に入って遊んだことはありません。

公共の遊び場は必要ありませんでした。自分たちで遊び場を作ったのです。アマーリエン広場 *Amalienplatz* が，私たちの運動場でした。当時は，まだ，実際には，何も栽培されていない畑地だったので，そこでサッカーをしました。通りでは，遊びという遊びをすべて，特にラウンダーズ，もちろんサッカーや，かくれんぼうなどをして，遊びました。女の子たちと一緒に紳士と淑女ごっこ，それに「何歩，お前の方に近づいていいの？」などという子供

の遊びもしました。ピストルなどの玩具はありませんでした。それに近所に，砂の採取地跡の小さな穴がありました。これは，瓦礫捨て場だったのですが，これをきれいに整地して，平地にしました。つまり，大きな穴を掘って，ゴミを入れ，ゴミ捨て車が来ないとき，近所の人たちも灰などをここに入れました。当時は，通りに置いてあるゴミ箱の蓋は無くて，回収もされませんでした。だから，そんなゴミを，ここにただ捨てていたのです。そこは，小路の奥の死角にあったので，私たちの遊び用作業場にしたというわけです。穴を掘って，ゴミを入れ，平地にしたのです。だから，私たちは，この場所をきれいにしたと，警察に褒められました。しかし，後に，ここで私たちがサッカーをしようとしたら，追い払われました。もう，きれいになっていたからです。しかも，囲いまでしたので，これをはずして，またここで遊んだのですが，それでも何も言われませんでした。

遊び仲間は，ほぼ同じ年頃の子供たちで，20人から30人の子供たちです。100メータくらいの通りの家々に，20人から30人の子供がいました。今では，このザール通りに出ても，子供の姿など見ることもありません。私たちの住んでいた家には，1，2才違いの，同じ年頃の子供がぜんぶで7人いました。この内，2人はマルティノ・カタリネウム・ギムナジウム *Martino-Katharineum Gymnasium* に行き，1人は中等学校 *Mittelschule*，これは今の実科学校 *Realschule* ですね，もう1人はオーカー通り *Okerstraße* の高等小学校 *Bürgerschule* に行っていました。これは，後に共産党員になったオスカー・フィッシャー *Osker Fischer* です。今もここにいる社民党員のエルヴィン・ハインツェ *Erwin Heinze* は，中等学校に行きました。私は，今もまだ，彼から党費を徴収しています。それにカールヒェン・シューラー *Karlchen Schüler* は，マルティノ・カタリネウムでした。彼の父親は，当時，アメリカの石油会社だったペトロリウム株式会社 *Petroleum AG* の在庫管理人でしたが，私たちには大物に見えました。彼は，運搬車が石油を貯蔵していくのを監視していました。彼は，このアメリカの石油会社の事務室も兼ねた，一軒家に住んでいました。しかし，私たち子供は，みな同じ階層に属している

かのように，お互いに何の問題もなく，一緒に遊びました。おもしろいことに，子供たちは，それぞれ違った服装をしていました。ギムナジウム生は，大きな皿形の帽子をかぶり，私たちのような国民学校生は，庇のついた学年ごとに色の違う帽子でした。１年生は，赤と白のリボンがついていました。２年生は銀と白，３年生は赤のリボンでした。だから，その後は，リボンの色で，一緒に進級できたか，落第したのかがわかりました。帽子は，下校後は，あまりかぶりませんでした。登校時や学校の行事のある時，または，母と街へ外出する時だけです。進級しようが，落第しようが，大きくなったら，みな違いはありません。高等小学校出のフィッシャーは共産党員，中等学校出はSPD歴50年，ギムナジウム出は残念ながら亡くなりました。彼は，私よりも１才上でした。彼は，アビトゥアの資格も取ったのに，後に，ここのルードルフ広場 *Rudolfsplatz* で石油スタンドをしていました。

8．親子関係

私は，親と喧嘩したことはなかったけれど，長兄が母と喧嘩ばかりしていました。母に叩かれたことはあります。夏で，肺炎になった直後のことです。体調が良くなっても，私は裸足で歩くことを許されませんでした。みんなが裸足だったので，裸足になったのです。そうしたら，一発お見舞いされました。靴を地下に隠しておいて，もちろん，家に入る時には，地下から靴を持ってきて，入ったのです。でも，地下へ何かを取りに行った母に，その靴を見られてしまったのです。「お前の靴はどこにあったの？」「あ～，その～」とごまかそうとしながら，寝室へ行って，籠の中に頭を入れたところで，背後から背中をどやしつけられたのです。つまり，寝室には汚れた洗濯物を入れる籠があって，洗濯するまでその上をタオルやシーツで覆っていました。そこに隠れようとしたのです。それからが大変で，さんざんお仕置きされました。

その他には，子供の時にタバコをすっているところを，同じ家に住んでい

る奥さんに見られて，母に言いつけられたのです。「いいかい，お前は肺結核になるんだから」と叱られ，その日から36才になるまで，もうタバコはすいませんでした。36才でタバコをすい始めて，戦争中か戦争後にやめましたが，もう一度，同じ事を繰り返しました。そして，また今，妻が亡くなって以来，タバコをすっています。母がお仕置きに使ったのは，布団叩きだったと思います。ひょっとしたら，箒だったかもしれません。お仕置きは，いつも何かそんなような物で叩かれたのです。父に殴られたことがあるかかどうかは，覚えていません。最後に叩かれた記憶は，最後の学年の1913年か14年だったでしょう。それ以後はないです。

子供時代に個人的な問題を抱えたことは，ありませんでした。だから，母と個人的な問題について話したこともありません。性の問題にしても，母から性について説明を受けた事はないし，兄からもありません。

問題といえば，たとえば，私の家では，軍隊用の箱の中に食糧を入れていたのですが，上の兄が，母が不思議がるほど，実にたくみにそこから食糧を盗み食いして，母に言いつけなければならなかったことくらいです。食糧がない時でしたから，これには心を痛めました。

母とは，よく理解し合っていましたが，父のいないことが寂しかったものです。父がいないということを，学校でも近所の向かいの家でも，どこでも感じました。たとえば，学校の図画の時間に，戦争用国債を描かなければならなかったのですが，反古の債券を見本用にもらいました。これを家に持って帰り，母に見せることができませんでした。母は，債券を買うお金が無いのを知っていたからです。翌日，学校で，それを見せるように言われた時，弁当用のパンを包むのに使ってしまって，もう持っていなかったのです。他の多くの子たちも持っていなかったのに，彼らは，叱られただけで，私だけが先生から殴られました。他の子供たちは，「父さんに言いつけてやる」と言うから，父のいない私だけを殴ったのです。近所で，子供どうしの喧嘩をすると，母が，「お前には父親がいないってことに，みんなが気がつくだろうよ，ローディー」などと言ったものです。少しばかり，そういったことが胸を刺

して，精神的に参りました。

〈ヨゼフと母の関係〉

ヨゼフは，ずっと独身でいました。とはいえ，長い年月のうちに，彼と母との間の関係が，進展しました。彼らは，一緒に外出したり，ハルツ地方への小旅行をしていました。友人関係だったと思いますが，私は子供だったので，どの程度まで進展したのかは，わかりません。まあ，叔父さんとの結婚関係になったのでしょう。それが，まさに長兄には気に入らなかったのです。彼は，結婚前に家を出ましたが，私たちにたいしては，悪い感じを残してはいきませんでした。兄は，ヨゼフと母が結婚するだろうと疑い，第二の父は望まなかったのです。「絶対に第二の父など認めない」と口に出しました。彼は，父のことを私よりも良く知ってもいました。父との結びつきは，私よりもずっと強いものだったのです。

〈家事手伝い〉

家事は，たとえば大きな洗濯物のような仕事は，もちろん母がしました。私が手伝ったのは，日中，家の中をきちんと清潔にしておくなどの家事で，私は，いつも，母の仕事を楽にしてやろうと思っていました。次兄は，かなり無関心だったので，いつも散らかしました。母が家に帰ってきて，仕事場であった嫌なことを訴えたり，しばしば涙を流して泣いているのを見ると，私は心を痛めたので，家事を手伝うようになったのでしょう。「僕は，今，家にいるんだから，きちんとしなければ」と自分に言いきかせたものです。たとえば，階段の掃除当番の時には，小さなバケツを持って，階段を洗いました。「お前は，また，水をあふれるほど，入れてるね」と回りの大人が言ったものです。まだ小さかったので，大きなバケツを運ぶことができなかったのです。最初の家では，地下には煉瓦がしかれていましたが，一部がトイレだったので，ここも水で洗いました。ロス通り 14 番の家です。後の家ではもう掃除の必要はありませんでした。掃くだけで良かったのです。最初の時期，ま

だ下宿人が来る前，私たちの家には，居心地の良い小さな居間がありました。4人で，3部屋でしたが，居間がありました。小さくて，いつも使われている居間でした。この居間で，小さな祝い事や誕生日などをしましたが，ヨゼフ・ツォルンが来て，彼がこの居心地の良い居間を，自分の部屋として使いました。この部屋には扉が二つあったので，洋服タンスが他の部屋に通じる扉の前に置かれました。彼は，廊下から直接，部屋に入っていたので，自分で掃除していました。彼は，母に「掃除の面倒をみてくれなくてもよいです」と言ったのです。だから，私にとっては仕事が軽減しました。もう，その部屋の埃を拭かなくてもよくなったのです。

私は，本当にもう小さい頃に，家事の手伝いをはじめました。ただの掃除だけではなく，当時は，まだ木の床でしたが，子供にしては本当にきれいに床を洗ったものです。

それに，兄のソックスを繕ったり，靴底を張ったり，できることはなんでもしました。子供なのに，母が家に帰ってきて，何か暖かい物を食べられるように，料理もしました。たとえば，恐慌の時期で，家族がとても困っていたときですが，コーヒー・ミルで丸麦を挽いて，ケーキを焼いたことを覚えています。ミルクは，不足物資だったので，水でといて，少しの砂糖を入れました。黄色い，精糖されていない砂糖でした。それに，2～3センチの厚さのホットケーキのようなものも，フライパンで焼きました。それが，家族が仕事から帰って，夕食にとる暖かい食べ物だったのです。それでも，家族は，喜んで食べました。とはいえ，後に，「まあ，ローベルト *Robert* が，我々に焼いてくれたのは，……ふーん，食べたけれども不味かった」と彼らが言うのを聞くはめになりました。本当に，たくさんの家事をしたのです。当時，私は9才でしたが，私には楽しかったのですよ。よその子供たちの親は，子供たちに「ローベルトを見習いなさい。あの子は，家で何でもしているんだから。料理したり，ケーキを焼いたり，ぜんぶしているんだよ」と言っていたものです。それが，私の家事の始まりで，修業時代もしましたし，後年，結婚してからもケーキなどを焼きました。今は，ぜんぶ，一人でやっていま

す。もちろん，修業時代は，母が仕事をやめていたので，それほど家事はしませんでした。母が働かなくても家計をやっていけたのです。それに，下宿人のヨゼフが部屋代を払ったり，多くの必要な物を援助してくれましたから。ヨゼフは，父との約束を真面目にとって，誠実に実行してくれたのです。

9．結婚

妻とは，私が体操選手やサッカー選手だった時に，妻は自由体操協会 *Freie Turnerschaft* でハンドボールをしていましたから，彼女が協会員になって以来，お互いに顔を見知ってはいたのです。当時，協会員同士の結びつきは，今よりもずっと強かったのです。農村部の協会では，まだ今でもそのようですが，都市部の協会では，創立記念日くらいにしか会員が揃うということはありません。他の機会には，お互いの接触はありません。ところが，私たちのところでは，そうではありませんでした。つまり，私たちも，女性の体操やハンドボールを見に行き，彼女たちもサッカーを見に来ました。1928 年の「悔い改めの日」（：教会暦最後の主日の前の水曜日）*Bußtag* に，男子と女子のハンドボール・チームが，一緒にヒルデスハイム *Hildesheim* へ試合に行きました。私は，本来，サッカー選手だったのですが，ゴールキーパーが怪我をしたので，私が，ゴールを守ることになったのです。それで，準備をしているときに，よくあることですが，ズボンが破れていることに気が付きました。そこに若い女の子がいて，「おいでよ，針と糸を持っているから，繕ってあげる」と言い，それは，ヒルデスハイムの居酒屋でのことですが，彼女は，すぐにズボンを繕ってくれたのです。その瞬間から，彼女が感じの良い女の子だということが分かりました。私たちは 19 才でした。特にヒルデスハイムですから，「悔い改めの日」には，音楽は禁止でしたが，私は，ピアノの前に坐り，ピアノは弾けないのですが，一本指で鍵盤を叩いて，音を出しました。彼女は，私がピアノを弾けると思いました。私も実際，いくらか曲らしい音を出したら，みんなが飛び跳ね回りました。それから，ハンドボールの試合

をし，帰って来ました。それで，汽車の中で同じコンパートメントに坐りました。19才の若い者にありがちですが，若かったので，みんなすぐに寝入りました。そして，隣同士で横になり，コートをかけ，キスもしました。それが，私の妻との最初のキスでした。

このヒルデスハイムへの旅行が，なれそめでした。その日から，私は毎日，彼女の練習後に，運動場へ迎えに行き，家まで送りました。まあ，そうして，私たちは，実際的には，一緒になり，後に結婚したわけです。私は，結婚前に女の子と何かしたことはないし，彼女も他の男とは何もありませんでしたが，私は，妻と結婚前に交渉しました。つまり，私たちは，この日を公式に知り合った日と名付けている「悔い改めの日」に知り合い，1929年の7月21日，彼女の誕生日の前日に，最初の性交渉をもちました。私は，19才で，ほぼ20才になっていました。

10. 性・避妊・妊娠中絶・私生児

私が最初に性に興味をもったのは，学校の5年生の時に，上級クラスの女の子マルガレーテ・フォス *Margarete Voss* が子供を生んだ時です。もちろん，私生児です。彼女は13才で，親は，ヘルマン通り *Hermannstraße* で雑貨屋をしていました。突然，あそこの娘が子供を生んだというので，私たちは，いろいろに想像しました。

次は，リスベート・マルテンス *Lisbeth Martens* でした。最後の学年で，非宗教授業をハインリッヒ・ローデンシュタイン *Heinrich Rodenstein* 先生に受けました。ちなみに，彼はまだ生きていて，ブラウンシュヴァイクの名誉市民です。最初は，私たちは，朝の1時間ほどの宗教の授業中，ペスタロッチ学校 *Pestalozzischule* で非宗教授業を受けてから，私たちの学校に戻っていたのです。後には，私たちの学校でも非宗教授業が設けられました。この授業では，16人の男女の生徒が一緒でしたが，これは，最高に珍しいことでした。このクラスにリスベート・マルテンスがいたのです。彼女は，その方

面で，かなりの発展家で，クラスではいつも何か言われていました。でも，いつもほのめかしだけで，直接にではありませんでした。早い時期に女の子と男の子が一緒にいると，気を付けなければならないということは，知っていましたし，そういう女の子の例がありました。彼女は，結局，学校を退学させられて，子供を生みました。その後，子供と一緒にいるところを見かけましたが，彼女は，大きくてがっしりした女の子でした。彼女は，14才で，もう17才の女の子がするような，大変な経験をしたものです。それが，性に関心を持った，きっかけでした。

それに，私たちの住む通りに，私よりも年下の男の子がいましたが，彼は，13才の時に女の子と逢い引きをしていました。MIAG社の物置場で出くわして，びっくりしたことがありました。MIAG社は，そこに馬のわらなどを置いておく家を持っていたのです。そこで，彼女と抱き合っているのを見たのですが，知っていることは，それだけです。その男は，その後，売春婦のひもになりました。彼は，ここのブルッフ通りを縄ばりにしていました。

まあ，こういったような出来事が，性に興味をもつきっかけになりました。

妻とキスする以前に，もちろん，他の女性との付き合いはありました。初めて女の子とキスをした時，私は12才でした。彼女は，同じ家の住人のエリスベート・シュタイン *Elisbeth Stein* といい，地下に行く階段でキスしたのですが，とても素敵でした。彼女はどもりましたが，可愛い人形のようでした。それは，彼女も私も地下室から何か取ってきて，一緒に上に出ようとした時で，「お前，もうキスしたことある？」と聞いたら，「ううん，まだしたことないわよ。したくもないわ」と言ったのです。それで，「来いよ。お前にキスしてやるよ」と言って，子供なのに，彼女に本格的にキスしたのです。キスし終わってすぐ，私も彼女同様に赤くなり，家に上がっていきました。それだけです。彼女は，私よりも年下で，11才かそのくらいだったのでしょうが，私は12才か13才でした。いずれにしろ，それが初めてのキスでした。

その後，また違う女性と知り合いましたが，兄が邪魔をしました。彼女は

18才で，私生児がいたのです。彼女は，私よりも2才年上で，もう18才で子供を生んでいたのです。それで，回りが「彼女は，息子のために夫が欲しいだけなんだ。息子の父親を欲しいんだから，手を出すな」と警告しました。彼女とは，ちょっと，「今日は」と家に行くくらいの，ただの遊びでした。彼女も，ロス通りのはずれの，茂みの前の家に住んでいました。まあ，それは，私が妻と知り合うまでの過渡期のことです。

〈避妊〉

妻とは，1929年の7月21日，彼女の誕生日の前の日に，最初の交渉をもちました。その前に，すでに一度，避妊方法や避妊具についての講演を聴いています。その後も2度，聴きました。ぜんぶで3回です。結婚前には，たいていは，コンドームを使用しました。コンドーム無しで交渉するほどの度胸はありませんでした。避妊ピルのようなものは，まだありませんでした。コンドームの値段は高かったし，それに，買いに行く恥ずかしさもあったので，コンドームを持っていない時もありました。今のように，どこにでも自動販売機があったわけではないのです。つまり，買う恥ずかしさが問題でした。ホーフマイスター薬局 *Hofmeister* に入って行き，「コンドームを3個ほしいのですが」と言う恥ずかしさです。いつも持っていたわけではありません。度胸がでるまで，迷いました。でも，そんな風にすると，次の生理日まだ，信じられないほど不安でした。つまり，子孫をあまりにも早くに作ってしまうのではないかという，信じられないほどの不安でした。

私は3人兄弟ですが，両親が避妊具を使用していたかどうかは，まったく分かりません。しかし，使ってはいなかったと思います。両親が，望んで3人の子供を生んだとは思いません。私は遅くにできた子で，兄より6才も下です。私の時は間違って作ってしまったのでしょう。妊娠がわかった時，両親は女の子を望んだそうです。

避妊具の知識を得たのは，ドクター・ルーベ *Dr. Lube* の講演会と本からです。本には，しかも，どのように性交をするのか，ありとあらゆる方法が描

かれていました。それも，避妊の役に立ちました。避妊具の知識を得た年齢はといえば，18 才から 20 才にかけて徐々にでしたが，主にドクター・ルーベに啓蒙されました。彼は，ブラウンシュヴァイクの病院の部長か，医務参事官でした。彼が，「ヴァンダーヴェルデの結婚」*Die Ehe von Vanderwelde* という映画を見せて，いろいろなことについて講演したのです。私が 17 才か 18 才か，19 才のことでした。この映画は，何度も上映され，講演は，映画の内容の詳細な説明でしたが，子供の作り方からお産，避妊方法や性病対策にに至るまですべて話してくれました。

そこで，私は，2～3 冊の本を借りました。マグヌス・ヒルシュフェルト博士 *Dr. Magnus Hirschfeld* の「性と愛」*Geschlecht und Liebe* などでした。本は，子供が一人いる，私の妻の若い友人夫婦が，「お前たちも子供を作るつもりなの？」と聞いてくれたので，「そのたび毎に，心配と不安なんだ」とか，いろいろ話したら，本を貸してくれました。それで，私たちは，これ以上はできないというところまで，いろいろ勉強しました。その本は返しましたが，その後，禁書になりました。

1931 年か 32 年にドレスデンの衛生博物館が，性病撲滅運動をしていたのですが，今の新市庁舎で展示をしました。この関係で，ブラウンシュヴァイク市の保健局が，ドクター・ルーベの講演会を催したのです。講演会には，たくさんの人が集まり，ザクセン・ホーフ *Sächsischer Hof* のホールは，いつも満員でした。テントをスクリーンにして，映画が上映されたものです。そんな風にして，啓蒙を受けたのです。学校では，先生が一人，ちょっと何か言ったくらいで，公式には性については，まったく教えてくれなかったので，性教育としては，かなり遅かったと思います。

〈妊娠中絶〉

誰かが妊娠中絶したという話を聞いたことはありますが，具体的なケースについては知りません。私が聞いたのは，「おい，あのリスベートが……」云々で，彼女は，今はもう 80 才を越しているでしょう。彼女は，ブラウンシュヴァ

イクで小間使いの仕事についていましたが,「あいつ,子供ができたんだ」「あいつとあいつがあやしいと思う」など言ってるうちに,突然子供ができて,彼女のお腹はぺちゃんこになっていました。

それは,私が13才頃のことでした。リスベートは,私の家の隣の,ロス通り13番の家に住んでいました。そのことは,近所では,あからさまに話されていました。

母は,中絶については,ただ,「子供に縛り付けられるようなことをして,なんてバカな娘なんだろう」というようなことだけで,中絶そのものについての見解は,何も言いませんでした。私自身は,中絶ということをよく想像できませんでした。流産したとか,女性が病気だとか,子供が生まれたけれど,病気で亡くなったなどということしか想像できませんでした。

〈私生児〉

学校では,私生児の子供は,本当にひどい扱いをされました。例えば,「ハインリッヒ・クイック」*Heinrich Quick* という子供の場合です。彼の本当の名前は,「クイック」ではないのです。彼が私生児だったから,そう呼ばれたのです。その子供が私生児だと,「お前の母さん,父さんは……」ということなのです。それは,いつまでも忘れられずに,新しいクラスになると,いつもまた個人的なことを詮索されたものです。彼は,一番元気な生徒でしたが,先生が,彼をコントロールできるように,いつも一番前に坐らなければなりませんでした。先生は,いつも「お前は,何にもなれないよ」と言っていましたが,彼は,後年,シェル株式会社 *Shell AG* のニーダーザクセン州代表になりました。大物になったのです。彼は,その後,ベーヴァーン *Bevern* の養護施設に入り,商業教育を受けました。数年前に偶然,メルセデスに乗った男が,私のすぐ前で急ブレーキをかけて止まり,「何てこった,道路からよけろよ!」と言い,私は「何てこった,ゆっくり走れよ」と,そうすると,「お前は,おれのことをもう覚えていないんだな」と彼が言うのです。彼は,昔は明るいブロンドの髪でした,そうですとも,明るいブロンドでした。「い

いや」と私が言うと，「ハインリッヒ・クイックだよ。お前たちの中で一番のさ」言ったのです。「何てこった，お前，ここで何をしているんだい？　そんな（急ブレーキの）音をたてて」と私が言って，……。

私生児の母親というのは，労働者の間でさえも，触れてはいけない者のように忌み嫌われました。私たちの家の隣にグレーテル・フリッケ *Gretel Fricke* という娘がいて，子供を生みましたが，誰の子なのかは，誰も分かりませんでした。彼女は，子供を生んだけれど，誰にも相手を言わず，相手の男にももう会わなかったのです。それで，彼女が近所を歩いている時に，3人でおしゃべりに興じている女の人たちに出会うと，「この，売女！」などと罵られたものです。彼女は，いつも半ば売女でした。労働者の間であっても，そのように扱われたのです。この問題にかぎっては，労働者の世界でも，中産階級の世界と同じモラルが通用していたのです。違いは大きくはないです。違いはなかったし，ひょっとしたら，もっと卑怯です。なぜかというと，ブルジョワ，つまり中産階級と呼ばれる，洗練された世界でも，もちろん，ある種のさげすみは受けます。しかし，ここでは，ノーマルな考えを越えています。彼女は，単に一人の男と関係し，結婚せずに子供を生んだというだけなのに，「見てごらん，この小僧を，この子は，グレーテルの子だよ」と大きくなった時に，言われるのですから。私たち子供には，そんなことは関係なかったので，その子を仲間にしました。しかし，「あの子と遊んじゃあいけないよ」「どうしていけないの？」「知っているだろうに，あの子には父親がいないんだよ。父親がどこにいるか，お前は知らないだろう」などと直接言う親がいました。いや母親たちの方がそういうことを言いがちで，父親たちは，そんなことは，あまり言いませんでした。

11．政党・労働組合・帰属意識

〈政党〉

私は，28年にドイツ社会民主党（：SPD）の党員になりました。18才にな

らなければSPDには入党できませんでしたから，その前の26年には社会主義労働青年(SAJ: *Sozialistische Arbeiterjugend*)に入っていました。当時は，まだ今のJusos(：*Jungsozialisten* 青年社会主義同盟)はありませんでした。

同様に，ライヒスバンナー青年部 *Jungreichsbanner* には28年までいて，ここでは，仲間同士の夕べ *Kameradschaftsabend* といっていましたが，仕事が終わってから集まり，実際には党活動のような政治活動をしていました。特別の催しがある時には，黄色のウィンドーヤッケを着て，黒と赤と金色のライヒスバンナーの帽章をつけた帽子をかぶり，サイレンと楽団付きで行進しました。この色の組み合わせを，ライヒスバンナーの黒と赤と金と呼んでいました。28年に，大人のライヒスバンナーに入りました。

この組織は，鉄の前線の柱 *Säule der Eisernen Front* のひとつとされていました。つまり，ナチスの侵入に対する非武装の防衛組織としての鉄の前線は，党，労働組合，労働者の体操・スポーツ運動とライヒスバンナーから成る4つの柱から成っていました。武器無しでは，何もできません。そのことに，私たちは，後の1933年，ここの地方疾病金庫での，鉄兜隊 *Stahlhelm* との最後の闘いの際に気が付きました。1931年10月にフランツ運動場 *Franzscher Feld* でナチ突撃隊 *SA* の大集会がありました。その時，カタリーナ教会 *Katharinenkirche* の牧師が，旗に祝福を与えました。どの牧師だったかはわかりませんが，彼らは大運動場礼拝を催したのです（注：キルヒナー牧師 *Herr Kirchner* がこの礼拝を司ったが，このことが原因で，彼は後に教会を出た)。

私は，当時，個々の共産党員とは，つまり，お互いに喧嘩をするとかということはなかったという意味でですが，関係は良かったのです。33年以降に知ったのですが，私たちの家に共産党員が住んでいました。私と彼との関係は，そんなにひどい関係ではありませんでした。すでに私の修業時代の会社にも，何人かの共産党員がいました。もちろん，目的とか，その他さまざまの事をめぐる論争では，意見が異なりました。当時は，共産党員は，今と違っ

ていました。彼らも，君や僕と同じ労働者なんだ，という印象でした。しかし，私たちは，彼らの考えすべてを理解はできませんでした。ただ，たとえば，コンサート・ハウスだったか，ホーフイェーガー*Hofjäger* かどこかで開催された，大集会の時に，彼らが，大論争をしかけてきて，私たちの集会の邪魔をしようとした事などです。これは，私たちが考えているようなものとは違うと気が付きました。彼らは，ここの市議会で，票決をとる時に，何度も，私たちの邪魔をしたのです。しかも，ブルジョワ政党と一緒になって，私たちの意見に反対の投票をしたのです。当時，33年以前ですが，すでにもうナチ党員は市議会にいたのです。私たちは，労働組合で一緒に活動していたにもかかわらず，まったく意見の一致を見ることができなかったのです。

共産党に入党した労働者の目には，当時の状況から見て，社民党員が十分にラジカルに使用者と交渉していないと映ったのです。たとえば，私たちのグリンメ&ナタリス社にヒムシュテット *Himschtett* という男がいたのですが，彼は自動旋盤工で，同時に共産党員の代表者でした。彼は，交渉中であっても，機会を見つけては，すぐに労働放棄，つまりストライキをしようとしました。かれらは，いつも深刻な対立をつくり出したがったのです。私たちは，当時すでに，いくらかは交渉を基盤にして，目的を達成する方法を支持していたのです。彼らは，基本的に，そうはしませんでした。

まだ若い，当時の私にとっては，おそらく交渉によって達成できそうなことを，彼らのように，とにかく暴力的にすぐにも達成させようとするのは，とんでもないことに思えました。当時，彼らの目にはいずれにしてもロシアの事が映っていたので，もっとラジカルにと思ったのでしょう。つまり，ロシアは天国だという考えを，私たちの中に取り入れようとしたのです。そんな風に考えたのでしょう。

労働者の中にはすでに共産党員のグループがありましたが，当時，党としては，社民党員の数と比べて，小さかったのです。たとえば，市議会では，20人の社民党員に対して，多分6人くらいの共産党員といった程度だったでしょう。それに，ドイツ党 *Deutsche Partei* とかドイツ国民党 *Deutsche Volks-*

partei などの他の政党がありました。しかし，選挙の時は，いつも失業問題が社民党に不利に影響しました。人々は，大失業の時代には，ナチか共産党を選んだのです。ここブラウンシュヴァイクでは，市議会の最大政党は，いつも社民党だったのですが，もちろん，そのせいで過半数を割ることがありました。共産党員の議席よりは多かったのですが，大経済恐慌で，共産党支持者がとてつもなく増えました。

入党の動機ですが，見習い修業に工場に行くと，そこの同僚たち，つまり職人の多くが，SPD の党員でした。そして，党の役員も私のところに来て，「聞いてくれ。君の親父代わりのヨゼフは，もう長いこと党員になっているが，君も入党するんだろう？」と言ったのです。それで，社会主義労働青年に入ったというわけです。だから，仕事場の同僚と身近な環境の影響で入党したわけです。私の二人の兄たちもすでに入党していました。だから，当然，私も入党しなければならなかったのですよ。まさに家族の伝統だったのです。まあ，実のところ，入党の動機は，私の政治的な確信からだったとは，言えません。確信を持つには，まだ若すぎました。当時は，まだ今日のようには，情報が入ってきませんでしたから。もし，今，18 才の若者が入党するとしたら，まったく違う考えからでしょう。当時は，そうではなかったのです。メーデーの行進の時は，私たちは何処へ行くにも，実際，党と一緒でした。党に属していなければならなかったのです。しかし，入党の時には，本当の目的は，ぜんぜん意識されていなかったのです。

とはいえ，入党した動機は，父がすでに労働者教育協会の会員だったのですが，これは，ブラウンシュヴァイクだけではなく，あちこちの町にあって，社民党の前身でした。だから，それが，当然，家族みんなに影響を与えたのです。

下宿人のヨゼフが，ブラウンシュヴァイクのフリーメーソン協会支部長と同時に平役員だったのか，副支部長だったのかは，わかりませんが，とにかく社民党支部の役員でした。そのために，私たちの家には，党やフリーメー

ソンのあらゆる活動家が出入りしていました。私は，青年式用にフリーメーソン連盟のポスターまで書かなければならなかったのです。ちなみに，私は，1930年から1933年まで，フリーメーソン協会員でもありました。

〈労働組合〉

労働者として，労働組合に組織されるということは，当然のことだと思います。それは，確信していますし，自分自身の決断でした。たとえ，それが職場委員に「君は，加盟しなければ……我々はここではみんなが組織されているんだ。だから，君も木工労働者連盟に属さなければならない」と言われて，動かされてであったとしてもです。

私は，まず1924年に木工業産業別労働組合 *IG Holz*，つまり木工労働者連盟に加盟しました。見習い修業の開始と同時に加盟しなければならなかったのです。私は，最初は，労働組合に加盟するまでは，鉋を握ることは許されなかったのです。工場に組合の職場委員がいて，工場長は，そのような活動については，何も言うことはできなかったのです。

私はブルンスヴィガの後，グリンメ＆ナタリス社に移ってきて，青い作業着を着て，工場へ行ったわけです。そうすると，職場委員がやって来て，「同僚よ，君は労働組合に入っているかね？」と言うのですよ。それで，「はい，木工労働者連盟に入っています」と答えると，「いやー，それはこの工場では意味がない」「君は，所属労働組合を変えなければならない」と言うのです。つまりドイツ金属労働者同盟 *DMV* に加盟しなければならないということだったのです。これが，1928年のことでした。だから，私は，24年から28年までは木工労働者連盟に，28年から33年まではドイツ金属労働者同盟に属していたということです。

具体的には，ある日，彼が「君の手帳を持ってきたまえ。そうしたら，私がそれを同盟に持って行き，（加盟組合名を）書き替えさせるから」と言ったのです。当時，総同盟があったので，私にとってはどちらに属していても，同じ事だったのですが。翌日，手帳を持ってくるのを忘れてしまいました。

そして，ちょうど，大きなレバーを下に降ろす作業をしようとしていた時に彼が来て，「それじゃあ，君は仕事を始めなくていいよ。組合の移動手続きをする前は，レバーのギアを入れてはいけないよ」と言い，さらに「同僚たちよ，君たちの新しい同僚は，同盟の手帳を忘れてきたのだが，彼が本当に組合員なのかどうか，私にはわからない。だから，我々は，先ず待たなければならない」と言うので，私は，仕事を始めるために，自転車で家に手帳を取りに行きました。

これは，就業時間中に起こったことなので，その分の労働時間は，有給休暇用チケットで穴埋めしました。当時は，そんな風でした。工具製作分野の組合は，とてもきびしかったのです。もし，労働組合の組合員でない者が仕事を始めると，工場の職場委員が，朝食用の休憩時間中に，「同僚たちよ，朝食後，われわれは仕事を始めないよ。この同僚は労働組合の組合員になるのを拒んでいるのだ」と言うので，その男は組合員にならないかぎり，また解雇されてしまうのです。

私は，グリンメ＆ナタリス社の工具製作工場で，そんな場面を経験しましたが，工具製作部門の連中は，本当に困ったものでした。この部門の労働者は，100パーセントが組織されていました。組織されていない者などいなかったのです。組織されていない者は，押しボタンにさわることさえできなかったのです。だから仕事をしたいから，労働組合に入った者もいたわけです。いつも職場委員が賃上げ交渉をするわけですが，誰かが，「組合に納める組合費で，１年に１本の新しいズボンを買えるのに」と言ってましたよ。賃上げといっても，１ペニヒか２ペニヒくらいのものでした。とはいえ，当時の物価は今とは違いますから，私たちの工場では，１ペニヒの賃上げのために，つまり99ペニヒから１マルクの時間給の賃上げを要求して，時限ストライキがあったのを覚えています。これは，実際には旋盤工具部門の３人の待遇をめぐる問題でした。１人が，１マルクの時給で，あとの者が99ペニヒだったのです。この１ペニヒの違いを問題にして，旋盤工具部門では，作業を開始しなかったのです。数時間にわたるものでした。これも28年か29年頃のグ

リンメ＆ナタリス社で起こったことです。失業の危険があっても労働放棄をやったのですよ。

〈組織の役員〉

1916年の16才の時から，自由体操協会員でしたが，その他のスポーツ協会には，入っていませんでした。

自由体操協会，自然愛好会，二つの労働組合，SPD，SAJ，青年ライヒスバンナー，ライヒスバンナーなどの組織に入っていたのみです。

それらの組織で，役員になったのは，自由体操選手協会の青年部委員会の委員長を17才から18才までつとめたのみです。青年部の時だから，28年から29年までです。その後に，大人の方の協会に入ったのです。その他の組織では，役員はしていません。1933年以前は，職場の経営協議会委員などもしたことはありません。ブルンスヴィガの経営協議会の委員を努めたのは，45年以降でした。市議会議員になったのも，それからずっと後のことです。

〈帰属意識〉

子供時代，自分が属す世界は，きっすいの労働者の世界であると思っていました。なぜなら，まず，祖父母にいたるまで労働者の家庭の出身だからです。それに加えて，私の育った環境です。つまり，ほとんどの家の住民が労働者であるような地域に住んでいました。たとえば，ヤスパーアレー*Jasper-allee*やその先の辺りには，公務員も，サラリーマンのような中産階級の人の家もありませんでした。私の家の辺りは，実際に，どのような点においても，労働者が支配的で，労働者の生活に色づけられていました。学校の環境も影響しました。だから，環境が私を形づくったのだ，とはっきりと言えます。

労働者の子供だということは，言われなくとも感じるものなのです。100メーターの通りに住んでいる，20人から25人の子供の群れの内の，たとえば，一人の女の子が，目立って良い服を着たり，まったく新しい自転車に乗っていたりする時に，私たちは，乳母車からはずした2つの車輪と，板のきれっ

ぱしをその間につけて，自分で二輪車を組み立てました。復活祭に，私たちが手製の二輪車に乗って遊んでいるそばを，まったく新しい自転車に乗った，女の子が通りすぎていくのです。ぴかぴかの新しい自転車です。これが，私が初めて「何てこった，僕たちは貧しいんだ！」「僕たちは貧しいんだ！」と思った最初の出来事でした。彼女の家は，母親が雑貨屋をしていました。「うわー，アンちゃん *Annchen* が自転車をもっている。あの家はお金があるんだ。僕の家は貧乏なんだ」と思うわけです。

MIAG 社の社長のアンメは，車で送迎されていました。ギーゼッケらの他の重役たちは，近くに住んでいたので，徒歩で会社に行きました。しかし，アンメだけは，夕方になると車が迎えに来ました。それは，私たちにとっては，特別なことでしたが，気に障りはしませんでした。気に障ったのは，公務員用出入り口でした。公務員といっても，これは MIAG 社の事務室で働いている事務職員用の出入り口で，エンジニアも職員でしたが，私たちは彼らを「公務員」と呼んだのです。彼らは，労働者とは別の出入り口を使っていたのです。それが気にさわり，腹をたてました。それで，私たちは，その出入り口の扉を大きな釘で釘付けしました。私たちは子供なので，まだ働いてはいなかったけれど，そこから入って行くのは，公務員だと知っていました。彼らは，ネクタイに襟付きのワイシャツで来て，労働者は襟巻きを巻いて，短いシャツで，あるいは，裸の胸のままで，中に入っていきました。公務員はそちらから中へ，労働者はここから，というわけです。事務職員には，守衛が立ち上がってお辞儀をし，挨拶をしました。そこから，彼らは，大きな階段を上って事務室に入って行ったものです。

それが私たちをいらいらさせました。そこで「彼らが，明日の朝，入れないようにしてやろう」というわけで，守衛が事務室中を見回る時を見はからって，ドアを釘付けしたのです。守衛は，まったく気が付きませんでした。彼は，背後にある建物に行っている間，物音を聞かなかったのです。翌朝，彼らは中に入ることができませんでした。これが，後に私がブルンスヴィガで働いていた時に，ナチ時代のことですが，ある出来事に影響を与えました。

つまり，突然，事務職員用カジノができた時のことです。つまり，食堂を，私たち労働者用の食堂と事務職員用カジノに分離し，そこにクッション付き安楽椅子などを置いたのです。私は，その場にはいませんでしたが，ある朝，押し入られて，クッション付き安楽椅子のクッションがすべて，ナイフで引き裂かれました。しかし，だからといって，労働者には何も起こりませんでした。確認されたわけではないけれど，私は誰がやったのか，知っています。一脚の安楽椅子も残さず，すべて引き裂かれたのです。この食堂の分離に対する労働者たちの抵抗は，すでに，この2種類の扉が，子供時代の私たちに，気づかせたことなのです。

12．祝い事・余暇

〈祝い事〉

私の両親の家では，誕生日であっても，祝い事はしませんでした。できる限りでの小さなプレゼントはありました。ズボン吊りや作業ズボン，作業着のような，すぐに必要としていたものです。私の長兄の結婚式は，家でソーセージの食事をして，それだけでした。私は，大きな祝い事は他には知りません。クリスマスは，私たちにとっては，いつもの日曜日と同じでした。ある誕生日にまた新しい作業着をもらい，「何てこった。ズボン吊りの方がいいよ」と言ったものです。これでは，いつも，仕事を思い出させられるからです。

労働組合のお祭りは，今のメーデーの規模では催されませんでしたが，メーデーは素晴らしく，もちろん，私たちのお祭りの日でした。しかし，私は，一緒に行進して，その場にいるというだけで，酒を飲んで，どんちゃん騒ぎはしませんでした。当時のメーデーのお祭りは，まだちょっと今とは違っていました。一緒に，クヴェルム *Querm* か，ここのパーヴェルシェ・ホルツへ行進して行ったのです。KPDがパーヴェルシェ・ホルツへ行くと，私たちはクヴェルムへ行ったのです。つまり，二つの行進があったということです。

私は，メーデーに，リヤカーに坐り，両親と一緒に，ビエンローダー・ヴェーク *Bienroder Weg* の上り坂を通って，ヴァルトフリーデン *Waldfrieden* に行ったのを覚えています。

その時の雰囲気は，まず，家を出て，たしかハーゲンマルクト *Hagenmarkt* だったと思いますが，ブラウンシュヴァイクのどこかの広場に集まり，行進していきました。私が3才の時，部分的に，集会は禁じられていました。そこで，一箇所の広場の名前だけが知らされ，三々五々に集まりました。そこから，歩道を歩いていったのです。つまり，ビエンローダー・ヴェークに着くまで，右側と左側の歩道を歩いていき，そこで行進行列をつくって，郊外に出たのです。行進の際，横断幕はあまりありませんでした。ほとんどの人が旗を持ち，何らかのもので飾っていました。赤い帽子や赤いネクタイやシャツなどを着込んで，赤いカーネーションは，みんなが付けていました。それに，いつも私のリヤカーの右側にも左側にも小さな手製の旗が付けられていたものです。集会では，まず演説を聞き，その後，グループになって討論をしました。そうするうちに，樽のビールが開けられるのです。メーデーの雰囲気は，こんなものでした。

〈余暇〉

私たち家族がいつも遠足に行ったのは，パーヴェルシェ・ホルツやリッシャウアー・ホルツ *Rischauer Holz* やクヴェルマーの森 *Querumer Wald* のような　近場ばかりでした。もっとも遠くても，ハイデ *Heide* やエルム *Elm* でした。ハルツには，学校の遠足でいきました。しかし，両親と一緒ではありません。両親と行く遠足の時は，父の自転車に一緒に乗っていくか，あるいはメーデーの集会の時は，子供用リアカーに乗せられて行きました。リアカーには，小さな赤い旗を付けていました。両親だけで出かけたことがあったかどうかは，覚えていません。父の生存時の夏には，ほとんど毎週，日曜日の朝に遠足に出かけました。冬もヌスベルク *Nußberg* まで父の手製の橇に乗りに出かけました。父が，ヌスベルクで，橇で膝にけがをしたことがありまし

た。

一度，母と一緒に，学校の長い休み中に，ハルツのヴァッサーレーベン *Wasserleben* 近郊のフェッケンシュテット *Veckenstedt* に，母を育ててくれた，大叔母さんの所へ遠出をしたことがありました。叔母さんは，年をとってからその土地の人と結婚しましたが，農家でした。1933年よりずっと前の子供の頃のことです。叔母さんは，ブロッケンホテル *Brockenhotel* の洗濯をしていたので，その間に，ブロッケンまでブロッケン・ケーブルカーに3回も乗りました。これは，もちろん，素敵な思い出です。彼女には息子が一人いましたが，ドサ回りの役者をしていて，イルゼンブルク *Ilsenburg* で公演したので，それも見ました。職業学校の遠足でも2度，ブロッケンには行っています。

少し大きくなってからは，自然愛好家運動に属していたので，親無しで遠足に出かけました。主に，26年あるいは23年だったかもしれませんが，ビュントハイム *Bündheim* でブラウンシュヴァイク支部の家を建てた時，少年にもできる仕事をしました。ハルツにも行って，ハルツのいたる所を探索しました。自転車で，往きは2時間半かけて，ハルツブルク *Harzburg* やビュントハイム *Bündheim* への上り坂を走り，帰りは2時間で降りてきたものです。私たちは，そこで週末を過ごし，山小屋の中で，藁を敷いて寝ました。この小屋は，建設用の小屋で，これを「森の梟」と呼んでいました。藁の上で少し寝た翌日は，石を運んだのです。下の石切場から，橇のようなもので石を上まで運びました。こんな風に，遠足をしたのです。

青年になってからは，1928年までですが，木工労働者連盟が音頭をとって，「フォルクスフロイント」社（注：新聞社）*Volksfreund* のホールで週に2回ほど，若い労働者が集まって，工作などをしました。これは，仕事の役にはたちましたが，私の余暇の興味の中心は，やはりスポーツでしたから，いわ

ば義務的なものでした。

当時，私は，まず，器械体操をし，続いてサッカーに移ったのです。その間，陸上競技もし，又，アクロバット体操のチームにも属していました。

私は，1916年から自由体操・スポーツ協会 *Sportverein Freie Turnerschaft* の会員でした。当然，1933年までです。1933年に解散し，40人でスポーツ・クラブ・ロイ *SC Leu* に合流しました。つまり，このとき，私は初めてこの協会に入ってみたのですが，このブルジョワの協会では，労働者スポーツ協会の会員は3名までという指令がでたので，34年までしかおりませんでした。私たちは，独立したチームとしてやっていきたかったのですが，私たちが地面を荒らすことに気が付いて，私たちの内の3名だけと制限をつけたのです。それで，私たちはそんなことを受け入れなかったのです。

自由体操・スポーツ協会は，社民党に属していた，とは言えません。もちろん，多かれ少なかれ，その傾向はありました。これは，労働者体操スポーツ同盟 *Arbeiter-Turn-und Sportbund* に属していたのです。この同盟は，社民主義者を基盤として設立されました。役員はすべて加入していました。私たちの場合もそうでした。

もちろん，傾向は，社民主義でしたが，協会の内部には，あらゆる政治的な傾向の会員がいました。大体の会員は，もちろん，多かれ少なかれ，労働運動に関わっていました。しかし，みんなが社民主義者だったというわけではないのです。私たちは，この協会を戦後の46年に再び創設しましたが，今では，ここのブラウンシュヴァイクで，カトリックの神父が初めてプレーしたサッカーチームとして知られています。というわけで，中断の後で，私は46年から，またここでサッカーを始めました。だから，強制された休止期間を除くと，私は64年間，自由体操協会の会員というわけです。その間にも，1934年から41年まで，いわゆる赤白スポーツ協会の VfB ブラウンシュヴァイクにも属していました。

その次に挙げるべき協会としては，自然愛好家運動でしょう。TV 自然愛好家と呼んでいますが，自然愛好旅行家協会 *Touristenverein Naturfreunde* が正式名です。これには 1926 年に加入しました。そして 1933 年に，やはりこの協会も解散していますが，当然のことながら，今また，これに属しています。今，私が属している協会すべてで，このような中断と再加入がありました。他には，何の協会にも属していません。これで，すべてです。

私は，演劇協会のフライエ・ビューネ *Freie Bühne* に属してはいませんでしたが，ここには特定の労働組合に属さない労働者が集まって，演劇共同体を結成して，小さな芸術的演劇を上演していたのです。家族のお祭りのようでした。彼らは，ここブラウンシュヴァイクのゲルデリンガー通り *Gördelingerstraße* のザクセン・ホーフ *Sächsischer Hof* を上演場にしていました。そこのホールは，おそらく 250 人か 300 人も収容できて，感じの良い舞台もあり，そこで数カ月おきに上演していました。出し物は「ウィリアム・テル」 *Wilhelm Tell* とか「賢いナタン」 *Nathan der Weise* のような民衆劇でした。

古典も上演していました。私の父の弟も，これに属していましたが，その間にどうかして仲違いし，それでハンス・ザックス *Hans Sachs* に移りました。彼は，筋金入りの社民主義者というわけではなかったのです。それに，フライエ・ビューネは，当時，いくらか自由主義的な傾向がありました。ハンス・ザックスは，フライエ・ビューネほどには，左翼的な傾向はなかったのです。